

オンライン上の接触場面における日本語会話の

IR (Initiative Response) 分析

—初級後半レベルの日本語学習者の

インターアクション—

鈴木小百合

【キーワード】日本語学習者、接触場面、会話データ、IR 分析、イニシアチブ

1. はじめに

神田外語大学留学生別科（以下、「別科」とする）では、2000年9月以降、主に海外の協定校からの交換留学生および IES 全米大学連盟東京留学センター（通称「IES 東京センター」）からのアメリカの大学生が、半年もしくは1年間日本語を学んでいる。

2020年春学期は、新型コロナウイルス感染症拡大の状況下、新たに来日もしくは前学期から在籍し、継続を希望した交換留学生46名での開講であった。そうした留学生の本学での学習機会を可能な限り確保し、大学関係者および地域社会への感染拡大リスクを極力抑えるため、学部授業同様に別科でも全科目オンライン授業が実施された。

本稿は、いまだ同感染症の終息見通しのつかない中、今後のオンライン授業に生かす知見を得るため、授業活動中の会話データの分析を行い、考察したものである。

2. 「インターアクション3」⁽¹⁾の授業

別科のコースは、日本語学習の入門レベルである1から上級レベルの7 (CEFR B2程度) まで、計7レベルで編成されている。本稿の対象となるのは、初級後半にあたるレベル3 (CEFR A2程度) の「インターアクション3」の授業である。レベル3の学生たちは、必修として週に8コマの日本語科目（「インターアクション」「文法」「語彙漢字」「読解作文」）を履修することになっている。「インターアクション3」は、そのうちの3コマを占めている。今回の緊急遠隔授業では、開講日を3週間程度遅らせ、留学生全員にオンライン授業受講のための機材を確保した上で、レベル3では『日本語でインターアクション』（凡人社）を主教材として、「インターアクション3」を開講した。

別科の「インターアクション」は、学習者が遭遇するであろう日本語話者との接触場面で必要とされる「言語能力」、「社会言語能力」、「社会文化能力」などを身につけ、場面に適した日本語の運用ができるようになることを目指したコースである。授業では、日本語

を使ったインターアクションのための「理解」、「準備」と「練習」に加え、「実際使用」を促すアクティビティ（Performance Activity、以下「PA」とする）も取り入れている（別科2020年科目概要）。接触場面（外国人場面）とは、話し手の全てが母語話者である「母語場面」に対し、外国人話者が参加する場面を指す概念である（ネウストプニー 1995: 187）。したがって、留学生は日本語話者との接触場面において、より場面にふさわしい対応ができるよう、教室外での実際使用場面につながる日本語の運用力を習得することを目指している。そこで、同クラスでは、学期中に留学生にとって身近なトピックを様々取り上げ、そこでの話し合いや練習や準備を経て、最後のPAで日本語母語話者とのインターアクションを経験する機会を設けている。本稿で取り上げるのは、そのPA実施時に収録された日本人大学生との合同授業での会話データの一部である。

3. 先行研究

会話分析には、その構造面や管理面などに焦点をあてた様々な研究がある（メイナード 1993）。IR分析（Initiative Response Analysis）は、二者間の会話をターン単位で分け、先行ターンとのつながりや機能の観点から18のカテゴリーに分類して、会話のイニシアチブの様相を探る手法である（Linell & Juvonen 1988）。18のカテゴリーは、イニシアチブの程度から、6つの評価点に分けられる。会話全体で見た場合、両者のイニシアチブが同程度であれば、その会話は対称的、どちらかに偏っていれば非対称的であると言える。

Linell & Juvonen（1988）らは、社会的関係性の異なる二者間の9つの会話を分析し、その中でも判事と被告、教師と生徒など、制度的場面における会話では強い非対称性が見られ、インフォーマルで友好的な日常会話や子供同士のやり取りでは非対称性が低いと述べている。会話におけるこうした非対称性は、日本語を母語としない日本語学習者の接触場面でもよく見られる現象である。

岩田（2005）は、中級日本語学習者と日本人大学生の10分間の自由会話をIR分析の手法を用いて調査している。その結果、アイデンティティカテゴリーの変化をきっかけとして、非対称的であった会話が対称的な会話へと変化したことを報告している。当初は「留学生対日本人」というカテゴリーで始まった会話が、立場の等しい「スポーツ愛好家」、さらに「同じイベントに参加する者」という関係性へと変化したことから、両者の会話における役割が対等なものへと変わり、会話における対称性の構築につながったのではないかと考察している。

また、岩田（2007）は、中級日本語学習者と日本人大学生5組の自由会話データをIR分析で調べた結果、接触場面における会話の対称性を決める要因は言語能力ではなく、会話参加者による談話推進のリソースとなる情報提供の有無にあると述べている。つまり、ある程度会話を維持できる言語能力があれば、発話の内容によって対称的な会話が可能であると示唆している。

では、基礎的な文法項目の学習を終えたばかりの初級後半レベルの学習者の場合には、オンライン上の接触場面においてどのような会話の特徴が見られるのだろうか。中級以上に言語能力が限られた話者の場合であっても、イニシアチブの観点からの対称的参加は可能であろうか。可能であるとすれば、その要因は何か。オンラインという限定された空間

において、実際使用場面につながる会話の実現を目指すために、「インタラクシオン3」で収録された会話データの分析を基に考察する。

4. 調査の目的

本稿では、Linell & Juvonen (1988) が提示した IR 分析の手法を用いて、オンライン上の接触場面における初級後半レベルの留学生と日本人大学生 5 組の音声データを分析し、会話の特徴を明らかにする。その結果を基に、今後のオンラインによる「インタラクシオン3」でのより効果的な PA に向けた教育方法改善のための示唆を得ることを目的とする。

5. 調査の概要

5-1 IR 分析の手法

IR 分析の手法は、岩田 (2005, 2006, 2007) を参考にした。岩田 (2006) は、Linell & Juvonen (1988) が示した 18 のカテゴリー (CT) に、接触場面に特有の「相手の理解を確認したり、問題がある時に協力を求めたりするターン」に相当するカテゴリーを加え、全 19 に分類している。本稿でも、接触場面の会話データを分析することから、確認や協力要求のターンが予想されるため、岩田のカテゴリー分類に準ずる。表 1 がその一覧である。

表 1 IR 分析のターンカテゴリー

ターンの特徴	カテゴリー (CT)	イニシアチブ的側面	レスポンス的側面
1. イニシアチブ・レスポンスの強さ	(1) >	強い (相手の反応要求)	ほとんどない
	(2) ^	弱い (内容を導入)	ほとんどない
	(3) < >	強い (相手の反応要求)	相手の先行隣接ターンにリンク
	(4) < ^	弱い (内容を導入)	相手の先行隣接ターンにリンク
	(5) <	ほとんどない	相手の先行隣接ターンにリンク
2. 先行隣接ターン以外の特定の先行ターンにリンク (局所性)	(6) ・ ・ >	強い (相手の反応要求)	先行隣接ターン以外のターンにリンク
	(7) ・ ・ ^	弱い (内容を導入)	先行隣接ターン以外のターンにリンク
	(8) ・ ・ <	ほとんどない	先行隣接ターン以外のターンにリンク
3. 自分のターンにリンク (自己リンク)	(9) = >	強い (相手の反応要求)	自分の先行ターンにリンク
	(10) = ^	弱い (内容を導入)	自分の先行ターンにリンク
	(11) < = >	強い (相手の反応要求)	相手の先行隣接ターンを無視して自分の先行ターンにリンク
	(12) < = ^	弱い (内容を導入)	相手の先行隣接ターンを無視して自分の先行ターンにリンク
4. 周辺のな内容にリンク (焦点性)	(13) : >	強い	相手の先行隣接ターンにリンク
	(14) : ^	弱い (内容を導入)	相手の先行隣接ターンにリンク
5. 不適切あるいは先送りと判断されるターン (適切性)	(15) —	ほとんどない	相手の先行隣接ターンにリンク
	(16) — >	非常に弱い	相手の先行隣接ターンにリンク
6. トピックの開始予告	(17) (>	弱い	
トピックの終結	(18) >)	弱い	
7. 自分の発話に関する相手の理解確認、協力要求	(19) = — >	弱い	自分の先行ターンにリンク

出典：岩田 (2005: 139)

ターンは、イニシアチブ的側面とレスポンス的側面の両面から判断される。イニシアチブ的側面とは、会話を先に進めさせる「前方志向型」性質のことで、その発話の内容によって強弱が判断される。例えば、質問など相手への反応を要求するものはイニシアチブが強いと言えるが、内容を導入するターンは弱い。一方、レスポンス的側面は、先行する談話にリンクした発言で、談話に一貫性を生じさせるといった「後方志向型」性質を持つ。レスポンス的側面は、ターンのリンク先によってイニシアチブの強弱に影響が表れる。例えば、相手の先行隣接ターンにリンクするものであれば、イニシアチブは弱い、それ以外の相手の離れた先行ターンや自分の先行ターン等にリンクするものはイニシアチブが強いと言える。また、最小応答や聞き返し等のターンは、イニシアチブが非常に弱く、自分のターンの先送りなどは、イニシアチブがほとんどないと判断される。こうした各ターンの特徴を分類して、イニシアチブの強さを6段階に評価したものが表2である。カテゴリ一横の記号は、ターンのコード化の際に使用するものである。

表2 ターンカテゴリの評価点

評価点	カテゴリ (CT)	カテゴリの意味
1 (ほとんどない)	(15) -	最もイニシアチブが弱く、ターンのパスなどの応答を先送りするターン
2 (非常に弱い)	(5) <	イニシアチブがほとんどない最小応答、相づち
	(16) ->	聞き返しや繰り返しによって応答を先送りするターン
	(19) =->	相手に協力を要求するターン
3 (弱い)	(4) <^	先行隣接ターンの内容を踏まえて新しい情報を付加するバランスの取れたターン
	(10) =^	自分の先行ターンにリンクし、新しい内容を導入するターン
	(8) ・・ <	離れた先行ターンにリンクする最小応答
	(18) >)	トピックの終結を表明するターン
	(17) (>	トピックの開始を予告するターン
4 (中程度)	(3) <>	先行隣接ターンの内容を踏まえた質問
	(9) =>	自分の先行ターンにリンクした質問
	(7) ・・ ^	離れた先行ターンや先行談話の内容にリンクし、内容を導入するターン
	(14) : ^	先行隣接ターンの周辺的な内容にリンクし、内容を導入するターン
	(12) < = ^	相手の先行隣接ターンを無視して自分のターンにリンクし、内容を導入するターン
5 (強い)	(2) ^	先行談話とつながりがなく、新しい内容を導入するターン
	(6) ・・ >	離れた先行ターンや先行談話の内容にリンクする質問
	(13) : >	先行隣接ターンの周辺的な内容にリンクし、相手に応答を要求するターン
	(11) < = >	相手の先行隣接ターンを無視して自分のターンにリンクし、内容を要求するターン
6 (非常に強い)	(1) >	最もイニシアチブが強いターン 先行談話とつながりがなく、相手に応答を要求する「拘束されないイニシアチブ」

岩田 (2006) を一部改変

評価1は、パスなどでターンを先送りするもので、イニシアチブが「ほとんどない」。評価2はイニシアチブが「非常に弱い」もので、最小応答や相づち、聞き返しや繰り返し等が該当する。評価3は「弱い」で、先行隣接ターンや自分の先行ターンにリンクして、新しい内容を導入するターンである。評価4は先行隣接ターンや自分のターンにリンクした

質問や離れたターンにリンクした内容導入のターンであり「中程度」、評価5は先行談話とつながりがなく新しい内容を導入したり、離れた先行ターンや先行談話の内容にリンクした質問等でイニシアチブが「強い」。評価6は先行談話とつながりがなく相手に応答を要求するターンで、「非常に強い」イニシアチブである。このようにイニシアチブの強さによって評価点を設けることで、会話データの対称性を可視化している。

分析にあたっては、会話分析の経験がある日本語教師1名に協力を求め、サンプルデータを用いて試験的にコード化を行い、カテゴリーの解釈について話し合った。その後、客観性を期すために、各自がコード化した1名分のデータを照合し、一致度を算出したところ83.3%という結果を得た。

5-2 PA参加者の組み合わせ

今回、調査の対象となったのは「インターアクション3」を履修する留学生(FS)5名⁽²⁾と日本人大学生(JS)4名の各ペアの会話データの一部である。留学生をFS1~FS5、日本人大学生をJS1~JS4として示す。そのうち、JS1は留学生2名(FS1、FS4)の会話パートナーとして2回のセッションに参加した。

各ペアの概要を表3に示す。日本人大学生は、いずれも本学学部の1年生であり、会話データはオンライン合同授業内で録音されたものを参加者の同意を得て使用した。1回のセッションの時間は15分程度であったが、各ペアは話題を変えて何回かトピックを繰り返すことができた。使用した会話データは、そのうち留学生が選んだ1つである。尚、年齢および滞日歴は、合同授業が実施された2020年6月時点のデータである。

表3 各ペアの概要

ペア	留学生	年齢	性別	滞日歴(月)	母語	大学生 日本人	年齢	性別	会話時間 (分)	ターン数	一分あたりの 平均ターン数
1	FS1	20代	女	10	インドネシア語	JS1	10代	女	5'13	72	13.8
2	FS2	20代	女	3	スペイン語	JS2	10代	女	5'28	128	23.4
3	FS3	20代	男	10	スペイン語	JS3	10代	女	4'13	48	11.4
4	FS4	20代	女	10	インドネシア語	JS1	10代	女	4'08	47	11.4
5	FS5	20代	男	10	ポルトガル語	JS4	10代	男	4'45	86	18.1

5-3 PAのトピック

PAのトピックは、「友達を遊びに誘う」である。留学生は、「インターアクション3」のPAとして、パートナーとなった日本人大学生とオンライン上の個別の部屋⁽³⁾で話すセッションに2回、相手を変えて参加した。このPAの目標は「相手の反応に気をつけて一緒に出かける約束をする」というもので、一方的な誘いにならずに、一緒に行き先を考えて決めるよう求められていた。パートナーとなる日本人大学生には、特に内容に関する制約は

設けず、活動の趣旨が伝えてあった。

セッションでは、双方初対面であることから、まず自己紹介をし、事前の練習や準備で行った活動を参考にして留学生が相手の趣味や好みについて尋ね、その場で適当なアクティビティを考えて遊びに誘った。その後、約束した内容に合わせて、待ち合わせ場所や当日の予定を話し合うという流れで進んだ。

留学生は、PAの前に授業内で社会言語能力や社会文化能力の観点からの話し合いや練習を重ね、リハーサルとフィードバックという準備段階を経て、この日のPAに臨んだ。PAでの会話は録音し、後の振り返りと評価に使用することがあらかじめ伝えられていた。

5-4 会話データ

録音された会話データを下の記号を参考に文字化した。今回のPAでは録画は行われず、音声データのみ収録し、分析の対象とした。

会話データで使った記号

↑ : 上昇イントネーション	↓ : 下降イントネーション	— : 音を伸ばす
、 : 一拍の間	(.) : ごく短い間	(0.6) : 6秒の間
() : 筆者による説明	haha, hh, hnbn, nhnh : 呼気音	X : 聞き取り不明
// : 次ターンの発話がこの時点から重なり始まる		

大浜 (2006: 9) を参考に一部改変

6. 分析結果

6-1 ペア1 (FS1 と JS1) の会話

ペア1の会話のIR分析によるカテゴリー分類の結果を図1、使用されたターンのイニシアチブの強弱のバランスを図2に示す。

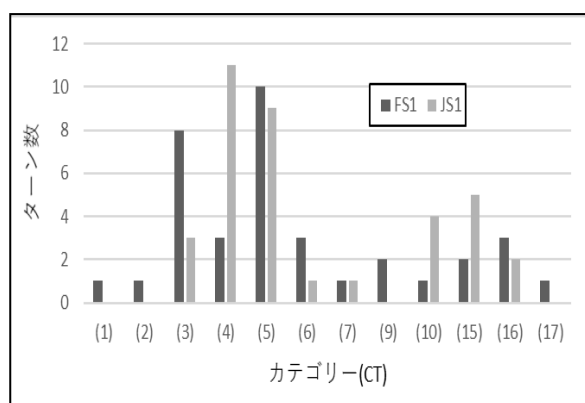


図1 ペア1のカテゴリー分類

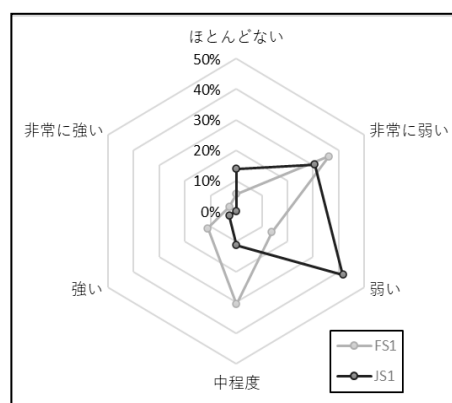


図2 ペア1のイニシアチブ

FS1のターンはCT5 [最小応答] が最も多く、次にCT3 [質問] で、全体の半数を占め

た。一方、JS1 のターンは、CT4 の先行隣接ターンへの [新情報付加] が最も多く、CT5 がそれに次ぎ、全ターンの過半数を占める。このことから、FS1 が積極的に JS1 に問いかけ、JS1 がそれに応答するというインタビュー形式の会話の様相がうかがえる。

それが見られる会話データの一部を会話例 1) に示す。

会話例 1)

21FS1: あー、すごい、えーと (.)、あーん、えーと、ディズニーランド、の時、行く、
行った、行ったの? 行ったの時間が、ありますか?

22JS1: あ、あります。何回も。たくさん、行きました

23FS1: あー、そう誰と↓、行きました?

24JS1: えーと、家族と行ったり↓、友だちと行ったり

25FS1: んー、楽しかった?

26JS1: 楽しかったです

FS1 は JS1 からディズニーランドが好きだと聞いた後で、21FS1、23FS1、25FS1 のようにその経験についての質問を続け、JS1 がそれに答える。こうして、相手から情報を聞き出し、「一緒にディズニーランドへ行く」という約束をとりつけるに至るわけだが、FS1 が積極的に相手に働きかけ、会話を進行させている様子がわかる。一方、JS1 側には FS1 からの質問に直接応答する発話は見られるが、質問やさらに話題を広げるようなターンはほとんど見られない。その結果、中程度のイニシアチブが見られる FS1 に対して、JS1 のイニシアチブは弱く、両者のバランスは対称的とは言えない。このような非対称的な会話となった要因の一つは、トピックに負うところが大きいと考えられる。今回の PA では「友達を遊びに誘う」という目標があったため、留学生が日本人大学生から好みや都合を聞き出し、約束を取り付けるという一方的な働きかけに終始してしまった可能性が考えられる。

また、ペア 1 の会話データからは、JS1 から提供された情報に対して、さらなる質問で情報を引き出すことはあっても、自分の意見や感想等を述べるなど、相手の発話に何らかの評価を示すターンはあまり見られなかった。日本語母語話者の雑談の会話分析を行った筒井 (2012) は、一つ的话题を持続させるためには、何らかの興味や関心を示す評価の発話が重要だと述べている。しかし、ペア 1 の会話では、FS1 の問いに JS1 が答えると言った一方向の情報提供場面が目立ち、双方の意見の一致を確認し、会話を深めるといった相手との関係性構築に向けた発展的な話題展開は見られなかった。また、岩田 (2007) が述べる参加者双方による情報提供も行われず、対称的な会話実現には至らなかった。

確かに日本人大学生に比べれば、留学生の日本国内の施設についての情報は限定的かもしれない。しかし、実際場面での会話では、特別な理由でもない限り、一方の話者の意向のみが反映されて約束が成立するわけではない。FS1 が JS1 に働きかけ、新しい情報を得たのと同様に、FS1 からも JS1 に何らかの意思表示や情報提供などを行い、双方向的インターアクションがあつてこそ、対称的な会話が成立するものであろう。ペア 1 の会話の特徴はこうした CT3 と CT4 のバランスが偏った【インタビュー型】にあると言える。

6-2 ペア 2 (FS2 と JS2) の会話

ペア 2 のカテゴリー分類を図 3、イニシアチブのバランスを図 4 に示す。

ペア 2 で顕著なのは、ターン数の多さである。表 3 に示したように 1 分あたりの平均ターン数が 23.4 で、どのペアよりも多い。しかし、カテゴリー分類を見てみると、双方 CT5 [最小応答] が多く、とりわけ FS2 は全ターンの 3 割以上を占めている。ここから、ペア 2 の会話は短いやり取りで進んでいる様子うかがえる。

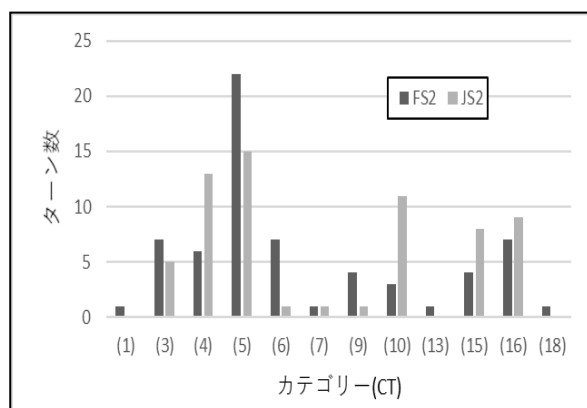


図 3 ペア 2 のカテゴリー分類

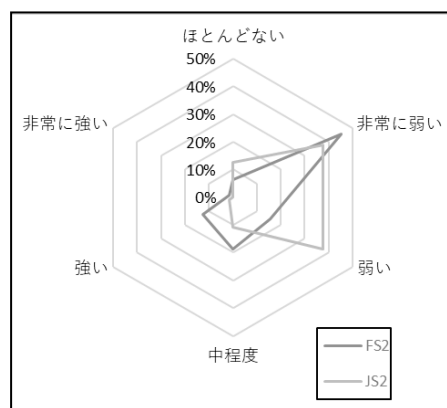


図 4 ペア 2 のイニシアチブ

会話例 2) は、FS2 の問いに JS2 が甘いものはあまり好きではないと答えた後の会話であるが、ペア 2 の会話のテンポが如実に表れている。このうち、43FS2、45FS2、47FS2、51FS2 が CT5 にあたるが、FS2 は JS2 の発話の合間に相づちを返しているのみである。一方の JS2 には、図 3 に見られるように様々なカテゴリーのターンが使用されているが、特に CT5 の他、CT4 先行隣接ターンへの [新情報付加]、CT10 自分の先行ターンへの [新内容導入] の使用がいずれも多い。これは、ペア 2 の会話の情報提供者が JS2 に偏っていることを示し、会話例 2) の 40JS2 が TC4、44JS2、46JS2、48JS2、50JS2、52JS2 が TC10 である。

会話例 2)

39FS2 : あー、じゃ、どこがいいかな、hhh、んー

40JS2 : カフェとか

41FS2 : カフェ？

42JS2 : カフェ？

43FS2 : うんうん

44JS2 : とかやったら

45FS2 : うん

46JS2 : ケーキとか

47FS2 : うん

48JS2 : ケーキとかじゃなくても

49FS2 : hhh

50JS2 : 他に何か、デザートとか売ってるから

51FS2 : うん

52JS2 : カフェとかもいいかもしれん

実際、図 4 の通り、FS2 のイニシアチブは非常に弱く、多少の質問によるターンで中程度のイニシアチブが若干見られるものの、JS2 とともに大半が弱いイニシアチブ以下にとどまり、どちらにも目立ったイニシアチブが見られないまま会話が進行していることがわかる。したがって、ペア 1 同様、ペア 2 の会話の特徴は、FS2 から JS2 への質問と回答が続く一方向的な【インタビュー型】と言えよう。

6-3 ペア 3 (FS3 と JS3) の会話

ペア 3 のカテゴリ分類を図 5、イニシアチブのバランスを図 6 に示す。

ペア 3 の平均ターン数は、表 3 の通り、1 分あたり 11.4 で 5 組中最も少ない。そして、FS3 のターンは、CT3 [質問] と CT16 [聞き返し] が多いのが特徴的であり、CT3 以外でのイニシアチブは非常に弱い。一方の JS3 のターンは、CT4 [新情報付加] と CT5 [最小応答] の使用が非常に多い。これは、これまで見てきた 2 つのペアのように FS 側に CT5 が多用されるのとは異なる特徴である。

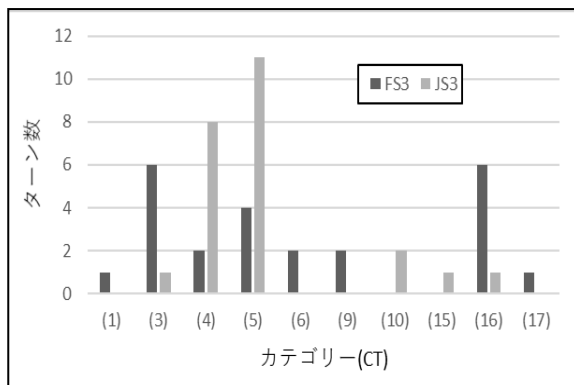


図 5 ペア 3 のカテゴリ分類

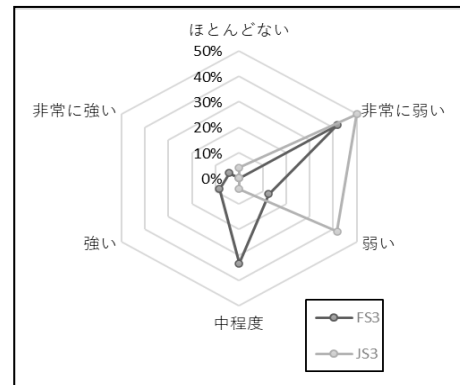


図 6 ペア 3 のイニシアチブ

では、実際にどのような会話がやり取りされていたかを会話例 3) で見てみる。これは、FS3 が JS3 を映画に誘い、予定があると非明示的に断られた後の会話の一部である。

会話例 3)

9FS3 : でも、えーと、映画、映画は、好きじゃない？

10JS3 : はい

11FS3 : え、え、映画館、好きじゃない？あまり好きじゃない？

12JS3 : あまり、行きません

13FS3 : んー、そうだね。えーと、それから、えー、別の日は、友だちと、いっしょに、何か、
できますか？

14JS3 : はい//

15FS3 : だいじょぶ？

16JS3 : できます

FSからの問いに対してJSが答えると言ったパターンはこれまでのペアと同様であるが、JS3は初めの回答に最小応答で返している。10JS3、14JS3がそれで、CT5〔最小応答〕のターンである。それに対して、FS3は11FS3や15FS3のように確認要求を行い、JS3が12JS3、16JS3のように表現を変えて再度応答するといったやり取りが続く。このように、ペア3の会話にはFSよりもむしろJSにCT5のターンが多く見られた。

なぜこのようなやり取りが多用されたのだろうか。ここには、JS3からFS3への配慮が働いていたのではないかと考えられる。つまり、回答の表現を簡素化して言語的な負荷を軽減することで、FS3の理解を支援しようとしていたのではないだろうか。実際に、JS3の発話には、文節ごとに区切って発音したり、相手の言葉を復唱して確認するといったフォリナー・トーク（スクータリテス 1981）も見られた。そうしたやり取りは、FS3の理解ペースに合わせて発話を調整する【サポート型】と言えよう。しかし、一方でFS3のターンにはCT16〔聞き返し〕が多く見られたように、相手の応答の意味を理解しかねている場面がいくつか見られる。これは、言語的な要因でJS3が回答を簡略化しすぎたためか、FS3の文脈理解が不十分なためか、或いは、心理的な要因で慎重に確認をしているだけなのかは、データ上からの判断では難しい。しかし、ペア3の会話では、双方非常に弱いイニシアチブにターンが集中し、FS3の質問に対し、JS3が極めて簡潔に応答するという非対称的パターンの会話展開であった。

6-4 ペア4 (FS4とJS1) の会話

ペア4のJS1は、ペア1のJS1と同一人物である。しかし、会話の様相は、非常に異なる結果となった。ペア4のカテゴリー分類を図7、イニシアチブのバランスを図8に示す。

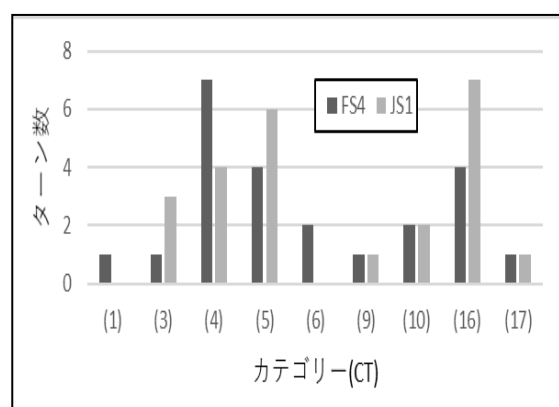


図7 ペア4のカテゴリー分類

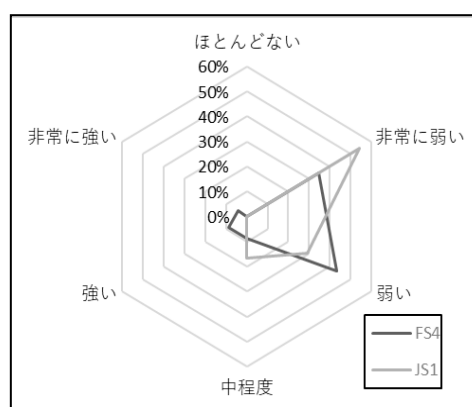


図8 ペア4のイニシアチブ

まず、ペア4の特徴としてあげられるのは、平均ターン数の少なさで、ペア3同様に1分あたり11.4で調査データ中最も少ない。そのうち、FS4のターンはCT4〔新情報付加〕

が7ターンで、全体の3割強にあたる。CT4は、これまで見てきた3つのペアの会話では、FSには少なく、むしろJSのターンに多かったものである。ペア1の会話の特徴として表れていたように、トピックの性質上、FS側の質問が多く、JSの応答がそれに続くというパターンが一般的に見込まれる中、なぜこのような結果になったのだろうか。

会話例4)にその会話の一部を取り上げ、実際に行われたやり取りを見てみる。

この中で、12FS4と18FS4がCT4に分類されたターンである。ペア4の会話の特徴として、まず、FS4が問いかけ、JS1がその問いについて聞き返したり、不足情報を求めたりといった情報要求をする。そして、FS4がそれに応答して、新たに情報を付け加えることで会話が進行していくというパターンである。

会話例4)

8FS4 : (省略) 日本で、おすすめ場所ありますか？

9JS1 : おすすめの場所？

10FS4 : そう

11JS1 : 場所？

12FS4 : そう。うん。買い物場所

13JS1 : うん、んーと、浅草？

14FS4 : 浅草？ () はい

15JS1 : が、おすすめです

16FS4 : 行ったことがありますか

17JS1 : あります。遊びに行きました

18FS4 : そうです (0.7) 浅草、私は行ったことはありません

19JS1 : ん

一方で、JS1のターンは、CT5 [最小応答] と CT16 [聞き返し] で過半数を超えている。19JS1 や 9JS1 がそれである。これはやや唐突に感じられるFS4の発話に対して、JS1が意図の確認のために聞き返しや繰り返しを多用しているためである。したがって、ペア間でのやり取りは続けられながらも、会話は前後しながら緩慢に進んでいく。実際、このセッションでは行き先の合意には達したが、待ち合わせの日時や場所等の相談までには至らなかった。

イニシアチブについては、図8に示すように、FS4に弱いイニシアチブ、JS1に中程度のイニシアチブが多少見られる。これは、上述のように先行する発話に対するJS1からの問いかけにFS4が答えるターンが多いためであり、JS1が積極的に会話をリードして進めていくというよりは、FS4の発話の意図を確認しつつ、サポートしながら、会話が展開していたと考えられる。

6-5 ペア5 (FS5 と JS4) の会話

ペア5のカテゴリ分類を図9、イニシアチブのバランスを図10に示す。

ペア5の会話は、他のペアとはやや異なる様相となった。それは、これまで見てきたよ

うに CT4 先行隣接ターンへの [新情報付加] での両者のターンに差がなく、CT5 [最小応答]、CT16 [聞き返し] についても同程度のターン数であったためである。これは、互いに相手のターンを受けて、何らかの新しい情報を付与し合って会話を進展させていることを示す。また、JS4 は他のカテゴリーへの分類が少なく、CT4 と CT5 以外では、CT10 自分の先行ターンへの [新内容導入] ターンが多く、会話で積極的に情報提供の様子がうかがえる。

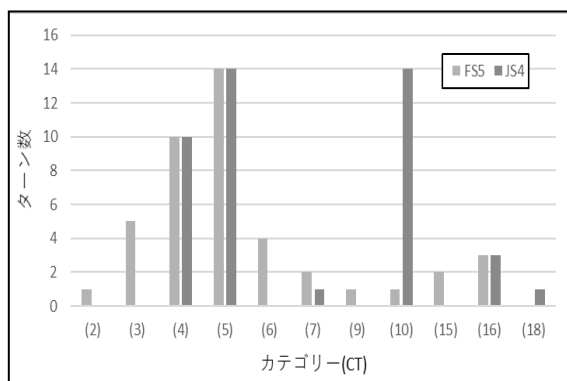


図9 ペア5のカテゴリー分類

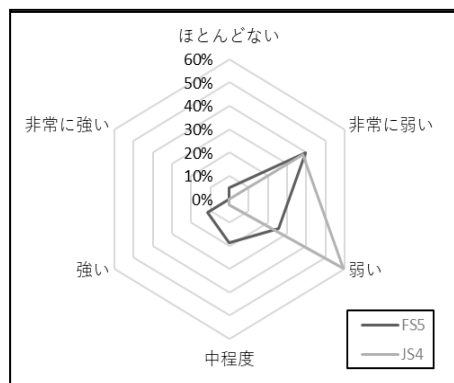


図10 ペア5のイニシアチブ

なぜこのような構図が生まれたか、会話例5) にペア5の会話の一部を示す。これは、JS4がFS5の国の著名なサッカー選手が登場するゲームをよくするという話の続きである。

会話例5)

41FS5 : どこで、やっていますか？

42JS4 : あー、あー、あれ？えーと、ケータイ

43FS5 : え？ケータイ？ホント？へえー

44JS4 : ケータイ、アプリ、アプリで

45FS5 : それは、めっちゃおもしろい↓

46JS4 : そうそう、ってか、最近は、もう、ケータイゲームばっか、クラロワとか、
知ってる、かな？

47FS5 : はい、はい、知ってる

48JS4 : クラッシュロワイヤル？とか、サッカー関係なければ、結構やってる

CT10 に分類されたのは、44JS4、46JS4、48JS4 である。これらのターンは、それぞれ隣接先行ターンの 43FS5、45FS5、47FS5 を受けて発せられたものである。FS5 は、これまでのペアと異なり、JS4 のターンを受けて、間髪を入れずに自分の感想や反応を返している。それに JS4 が答え、更に情報を付加して、友人同士のようにテンポよく会話を発展させている様子がうかがえる。

評価点の割合では、JS4 のターン中に弱いイニシアチブが比較的高い割合で認められた。それは、これまで見てきたペア1から3のJSの発話のようにCT4、つまりFSからの質問

に対する応答ターンだけではなく、JS4 の場合には、自分の先行ターンにリンクして新しい内容を導入する CT10 が多いためである。JS4 は自発的に新たな情報提供を行い、話題の展開に貢献していると言える。これは、ペア 5 の会話に非常に特徴的な点である。

このペアの会話は、対称的な評価点の分布には至らないまでも、3つのカテゴリで同等のターン数が確認され、比較的バランスの良い【友達型】の会話が展開されていたと言える。

7. 考察

これまで見てきた5つのペアのIR分析による会話の特徴は、表4のようにまとめられる。

表4 各ペアの会話の特徴

	カテゴリ (CT)	イニシアチブ	会話の特徴
ペア1	双方 CT5 [最小応答] が多く、FS1 は CT3 [質問]、JS1 は CT4 [新情報付加] が多い傾向にある	FS1 に中程度のイニシアチブが見られる	FS1 の問いかけに JS1 が答えるという構図で、FS1 からの情報提供や意見開示、感想、評価などはあまり見られない 【インタビュー型】
ペア2	双方、様々なターンカテゴリーを使用しているが、FS2 は CT5 [最小応答] が三割を占め、JS2 は CT4 [新情報付加]、CT5、CT10 [新内容導入] が多い	双方に目立ったイニシアチブはあまり見られない	JS2 が情報提供や話題の展開をリードし、FS2 は最小応答で返すパターンが目立つ。短いターンが多数交わされた 【インタビュー型】
ペア3	FS3 は CT3 [質問] と CT16 [聞き返し]、JS3 は CT4 [新情報付加] と CT5 [最小応答] のターンが多い	FS3 に中程度のイニシアチブが見られる	FS3 が中程度のイニシアチブを示すも、JS3 の応答には、FS3 への慎重な配慮が見られる 【サポート型】
ペア4	FS4 は CT4 [新情報付加]、JS1 は CT5 [最小応答] と CT16 [聞き返し] のターンが多い	双方に目立ったイニシアチブはあまり見られない	JS1 が FS4 の発話の意図を確認しつつ、会話が前後しながら展開する 【サポート型】
ペア5	JS4 に CT10 [新内容導入] のターンが目立つが、双方 CT4 [新情報付加]、CT5 [最小応答]、CT16 [聞き返し] は同程度のターン数	双方に目立ったイニシアチブはあまり見られない	互いに情報や話題提供をし合いながら会話を進めている。FS5 は自分の感想や意見も述べ、JS4 は積極的に情報提供を行い、双方が話題の継続に貢献している 【友達型】

ペア1と2は、主にFSが質問し、JSがそれに応答する形で情報提供を行い、会話が進んでいく展開であった。そこには、FSからの情報提供や意見、感想などの表出はほとんど見られず、質問者と回答者という【インタビュー型】の役割分担が続いたため、最後までそれ以上の関係性の構築は見られなかった。その理由として、トピックが「遊びに誘う」であったため、約束を取りつけることを重視し、実際の接触場面の機会を十分に生かしきれなかったのではないかと考えられる。確かに今回のPAは、「インターアクション3」の中での活動の一つではあるが、同時に、初対面の留学生と日本人大学生が接する場面でもあった。したがって、本来の出会いによって生じるはずのプロセスが看過され、首尾よく相手との約束を取りつけることにのみ専心してしまった可能性がある。実際、ほとんどのペアが簡単な自己紹介の後で、すぐに誘いのトピックに移り、会話を展開させている。もう少し互いに打ち解けてから、トピックである「友達を遊びに誘う」会話へと続く流れにつながる工夫が必要だったように思われる。PAの本来の目的が教室場面と実際場面をつなげる場を設けることであることから、互いを知り、質問者と回答者以上の関係性の構築を目指すことは、むしろ本来の目的にかなうことである。

一方、ペア3と4の会話では、JSのFSに対する言語的配慮がうかがわれた。JSにはFSの理解の程度や発話の意図に留意し、応答の仕方を調節したり、不足情報を補ったりして、会話の継続を支援する【サポート型】対応の様子が見られた。IR分析の結果では、FSがJSへの回答確認で質問を行っているため、ペア3のFS3に中程度のイニシアチブが見られたが、実際には、JSのサポートなしでは成立が難しい不安定な会話展開であったと言える。しかし、これは初級後半レベルの接触場面では、珍しくはない構図であり、相手からのサポートを引き出すこともストラテジーの一つと考えられる。

では、こうした状況をいかに次のステップへとつなげ、自立的な日本語話者を目指していけばよいだろうか。

牛窪・西村(2016)は、中級の会話授業でアーティキュレーションの観点から学生の教室内外の言語活動をつなぐ実践研究を行っている。その中で、学生たちは自身の会話を録音し、教材化して振り返ることで「自己モニタリング能力」を育成し、教室内外での活動を自身の言語活動と連続性を持つものとしてとらえることが可能であると述べている。上述の2組のペアの場合にも、自身の会話を振り返ることが、そうした自己モニタリングの視点を強化して、自らの課題を発見し、改善し、実際場面でのインターアクション能力の育成へとつながっていくのではないかと考える。

また、今回のPAでは、事前にFSのおおよその日本語レベルや会話の目的について、JS側に連絡済みではあったが、JS側にしてみれば、初対面のFSとどの程度の日本語で話せるのかは、実際にやり取りをしてみるまでわからなかったであろうと思われる。しかし、PAでは、各セッション15分の持ち時間のところ、どのペアも5分前後で1つの話題を終えていた。そうした短いセッションでは、十分に相手の日本語能力が把握しきれないまま、会話が終了してしまった可能性もある。その結果、両者の関係は、日本語学習者と母語話者である支援者に終始してしまったのではないだろうか。岩田(2005)の研究でも指摘されたように対等なアイデンティティカテゴリーの交渉と選択が対称的な会話の実現には重要であることが示唆される。今後のセッションでは、メイントピックに入る前に、もう少し

しお互いを知るためのやり取りができるよう準備段階で工夫が必要である。例えば、個別セッションの前に、全体で簡単な自己紹介やゲームなどのアクティビティを取り入れ、アイズブレイクの時間を設けたり、PA を段階的に進められるようなワークシートを用意することなどが考えられる。また、オンライン環境ならではの特性を生かして、限られた言語能力を補うために、視聴覚資料を共有したり、その場で翻訳ツールを利用したり、チャット機能を使って文字でのやりとりを加えることも可能である。今後は、そうしたツールの利用について、準備段階でもう少し積極的に学習に組み込み、PA で生かすことも考えたい。

また、5 ペアの中で唯一、一部のカテゴリーの使用において対称性が見られたペア 5 の会話では、情報提供の点では JS が FS に勝っていたが、PA の間、非常に弾んだ【友達型】会話が展開され、最後は互いの連絡先交換へと今後の関係性構築への兆しも見られた。そうした円滑な会話を実現できた要因は、他のペアには見られなかった初期段階でのやり取りにあると思われる。ペア 5 では、FS が JS を誘うまでに 58 のターンが交わされ、最終的に「サッカーの試合をする」という約束も、自己紹介からの自然な流れの中で生じた話題であった。それは、あらかじめ用意されたものではなく、FS が JS に会って、話をしているうちに、互いの興味が一致することを発見した後に示された提案であった。したがって、両者の関心は本物であり、約束が結ばれた後も、同じ話題のまま会話がしばらく続けられた。これは、実際場面に教室内に実現できた好例であったと言えよう。

これら、5 つのペアの会話分析からは、互いの関係性の構築が重要であることが示唆される。「インターアクション 3」に参加した日本語母語話者と非母語話者という関係よりも、まずは同じ大学で学ぶ学生として友好的関係を築き、その基盤の上でインターアクションを進めることが、より円滑で実際場面に近い会話の実現につながるとと思われる。

8. まとめ

今回は、オンライン接触場面における初級後半レベルの日本語学習者の会話データを IR 分析によって調査した。その結果、イニシアチブの取得は、必ずしも言語能力の高低によるものではなく、初級後半レベルの日本語学習者であっても、母語話者を相手に中程度のイニシアチブを取ることができることがわかった。しかし、それは非対称的な会話となり、必ずしも円滑な会話展開とは言えず、「インターアクション 3」の本来の目的である「場面に適した日本語の運用能力」習得のためには、対称的な会話を目指す必要がある。本稿で取り上げた 5 つの会話には【インタビュー型】【サポート型】【友達型】といった特徴が見られ、その中で【友達型】が最も対称性が見られる会話であることがわかった。そして、その基盤に友好的関係性の構築があることが示唆された。

したがって、今後の授業実践では、話者同士の関係性構築を重視し、出会いから会話の終結まで連続性をもった話題展開を目指すことが重要だと考えられる。また、自らの会話を振り返ることで、学習者自身の気づきを促し、各自のインターアクション能力の改善につながられるよう授業実践で取り組みたい。特にオンライン授業では、伝達手段として、視聴覚資料やコミュニケーションツールなどの利用もしやすい。そうしたデジタルツールの利用についても、会話の内容を深め、互いの意思伝達をサポートするものとして、今後の授業では、さらに積極的に取り入れていきたいと思う。

今回の調査では会話データのみを扱ったが、今後は、参加者への半構造化インタビュー等を用いて具体的な発話の意図や理解度などを確認することで、より詳細なデータ分析が可能であろう。また、本稿で取り上げたのは、IR 分析のための一部の会話データに過ぎず、取り上げられなかったデータにも授業改善への多くの示唆が含まれていると考えられる。インターアクション能力は、言語能力以外にも社会文化能力、社会言語能力を統合したものであるため、留学生個人の文化的背景も反映されると考えられる。したがって、文化的背景の異なる学習者間の比較や特徴の分析も重要である。これらは、今後の課題としたい。

謝辞: データ提供に快く応じてくださった留学生と日本人大学生の皆様に感謝いたします。

注

- (1) 2020 年春学期の「インターアクション 3」は、2 クラス開講されたが、本稿で扱うのは、そのうちの 1 クラスの会話データである。
- (2) 本クラスの学生は全 7 名であったが、今回は二者間の対称性を見るために、二人ずつのペアとなった組み合わせの会話データのみ扱った。
- (3) オンライン授業では、Web 会議システムの Zoom を使用した。

参考文献

- (1) 岩田夏穂 (2005) 「日本語学習者と母語話者の会話参加における変化—非対称的参加から対称的参加へ—」『世界の日本語教育』15、135-151. 国際交流基金
- (2) 岩田夏穂 (2006) 「イニシアチブ—レスポンス分析の課題と可能性—日本語の会話に適用する場合—」『言語文化と日本語教育』31、66-69. お茶の水女子大学
- (3) 岩田夏穂 (2007) 「留学生と日本人学生の自由会話に見られる参加の対称性と非対称性」『言語文化と日本語教育』33、1-10. お茶の水女子大学
- (4) 牛窪隆太・西村由美 (2016) 「留学における学習環境の連続性をどうとらえるか—教室外環境を活用した会話教育の試みからの一考察—」『関西学院大学日本語教育センター紀要』5、7-22.
- (5) 大浜るい子 (2006) 『日本語会話におけるターン交替と相づちに関する研究』(溪水社)
- (6) 神田外語大学留学生別科 2020 年科目概要【必修科目】
https://www.kandagaigo.ac.jp/kuis/cms/wp-content/uploads/2019/08/2020spring_summary_j_required.pdf (2020 年 10 月 8 日)
- (7) スクータリデス A. (1981) 「日本語におけるフォリナー・トーク」『日本語教育』45 号、53-62. 日本語教育学会
- (8) 泉子・K・メイナード (1993) 『会話分析』くろしお出版
- (9) 筒井佐代 (2012) 『雑談の構造分析』くろしお出版
- (10) ネウストプニー J.V. (1995) 『新しい日本語教育のために』大修館書店
- (11) 吉田千春 (編著)・武田誠・徳永あかね・山田悦子 (2014) 『日本語でインターアクション』サウクエン・ファン (監修)、凡人社
- (12) Linell, P., Gustavsson, L. & Juvonen, P. (1988) International dominance in dyadic communication: a presentation of initiative-response analysis, *Linguistics*, Vol. 26: 415-442.